

北魏敦煌鎮写經の書風について

大 屋 正 順

はじめに

本稿では、北魏朝治下に敦煌地方で行われた写經の書風についてその特徴を整理することを目的とし、特に 511～514 年頃に指導的立場にあったとされる令狐崇哲が関わったものを中心に扱う。

令狐崇哲が関わった写經の書風にいち早く注目し「北魏敦煌鎮写經、又名 令狐崇哲經」とまで言い切ったのは藤枝晃氏¹⁾で、一つの写經所で一人の師匠に率いられた弟子たちが、特定の書風で書写した写經群の最初の例であると位置づけている²⁾。この令狐崇哲という人物は生没年代等詳細が不明であり、令狐一族についても、敦煌の名家であったのだがやはり詳細は不明である³⁾。

藤枝氏は、令狐崇哲の名が記されている 11 点の写經の識語を整理しているが、その後、池田温氏がまとめた古代中国写本の識語集録⁴⁾では北魏朝の写經情報も更新され、令狐崇哲の名が記されている新たな写經も加えられた。識語の内容を統合することで人物像や活動の様子が浮かび上がってくるため、これまで各氏が明らかにしてきた情報の整理を試みたい。

ここで、池田氏の著書の時点（1990 年）では現物が公にされていなかった写經が閲覧可能となった点についてまずもって言及しておきたい。

敦煌写本の大部分はロンドンの大英博物館・図書館、パリの国立図書館、北京図書館、北京大学図書館、ロシアのレニングラード科学アカデミー東洋学研究所、上海図書館などに保管され目録が完備されているが、その他個人蔵のものも中国や日本を中心に散在している。個人蔵の大部なものの一つに

李盛鐸（1859-1937）旧蔵本があるが、王重民の目録⁵⁾では敦煌遺書散録として「李氏鑒藏燉煌寫本目錄（據傳鈔本）」「李木齋舊蔵燉煌名跡目錄」などと記され、所在不明で目録上のみの文献として集録されている。李盛鐸が職権を利用して私蔵した収集品は暫くの間は学者が閲覧可能であったため目録に記されているが、1930年代に海外へ売却されて以降は公になることがなかった。

この度その李盛鐸コレクションが刊本『敦煌秘笈』という形で公開された⁶⁾。財団法人武田科学振興財団杏雨書屋が2009年より順次刊行し、目録冊1冊・影片冊9冊が2013年3月25日に揃ったもので、落合俊典氏のことばを借りるならば、「敦煌蔵経洞の発見以来百年の星霜を経てようやく敦煌写本の総体が明確になりつつある今日、唯一未公開のコレクション⁷⁾」がやっと公開されたことになる。『敦煌秘笈』に紹介されている羽田亨コレクション736点は、李盛鐸コレクション432点とそれ以外のルートで入手したものの304点で構成されている。なお、李盛鐸コレクションが羽田亨氏の手へ渡った経緯については、杏雨書屋館長吉川忠夫氏の刊行の辞に詳しい⁸⁾。

売却された李盛鐸コレクションは公開されなかっただけで、所在は研究者のあいだでは公然の秘密であったようであるから、おそらく池田氏も現物を閲覧しているが、諸事情に鑑み著書の段階では当該写經の所蔵を「李盛鐸（旧）」とし図版には言及しない形をとったのであろう。

1. 令狐崇哲について

まず、池田氏の研究（以下〔池田集録〕と表記）⁹⁾を基礎資料としてそれに『敦煌秘笈』等を加える形で令狐崇哲周辺の情報を整理する¹⁰⁾。

令狐崇哲が書写者として出の場合と「典経師」として出の場合がある。令狐崇哲自ら書写したとされる4本（No.6,8,12,14）中3本（No.6,8,12）が華嚴經、1本（No.14）が成実論であり、全体としても16本（〈疑〉を1本含む）中7本が華嚴經である。当時の敦煌鎮での流行あるいはこの写經所に与えられた任務など、何かしらの意図をもって選択されたことも考えられ

【表 1】¹¹⁾

No.	經論名	書写年時	書写者	典經師・校經道人	所蔵／池田 no.
1	成実論 卷 14	永平 4 年 (511) 歲次辛卯 7 月 25 日	敦煌鎮官經生 曹法壽 所写論成訖	典經師 令狐崇哲 校經道人 惠顯	S1427 (池 154)
2	成実論 卷 14	延昌元年 (512) 歲次壬辰 8 月 5 日	敦煌鎮官經生 劉廣周 所写論成訖	典經師 令狐崇哲 校經道人 洪儒	S1547 (池 156)
3	華嚴經 卷 41	延昌 2 年 (513) 歲次水巳 4 月 15 日	敦煌鎮經生 曹法壽 所写此經成訖	典經師 令狐崇哲 校經道人	故宫博 (池 158)
4	華嚴經 卷 8	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 4 月 17 日	敦煌鎮官經生 令狐礼太 写經訖竟	典經師 令狐崇哲 校經道人	北 0672 (池 159)
5	摩訶衍經 卷 32	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 6 月 20 日	敦煌鎮經生 馬天安 所写經成訖	校經道人 典經師 令狐崇哲	書博 (池 160)
6	華嚴經 卷 35	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 6 月 23 日	敦煌鎮經生 師令狐崇哲 所写經成訖竟	校經道人	P2110 (池 161)
7	大樓炭經 卷 7	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 6 月□□日	敦煌鎮經生 張顯昌 所写經成訖	典經師 令狐崇哲 校經道人	S341 (池 162)
8	華嚴經 卷 39	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 7 月 15 日	敦煌鎮官經生 師令狐崇哲 所写經成訖竟	校經道人	S9141 (池 163)
9	華嚴經 卷 47	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 7 月 18 日	敦煌鎮經生 張顯昌 所写經成訖	典經師 令狐崇哲 校經道人	大谷大図 (池 164)
10	華嚴經 卷 16	延昌 2 年 (513) 歲次水巳 7 月 19 日	敦煌鎮經生 令狐永太 写此經成訖	校經道人 典經師 令狐崇哲	S2067 (池 165)
11	大智度論 卷 12	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 7 月 28 日	敦煌鎮官經生 張乾護 所写訖竟	典經師 令狐崇哲 校經道人	大谷家 二葉莊《旧》 (池 166)
12	華嚴經 卷 24	延昌 2 年 (513) 歲次癸巳 8 月 27 日	敦煌鎮經生 令狐崇哲 所写經成訖竟	校經道人	李盛鐸《旧》 (池 167) ※羽 262 (敦煌秘笈)
13	大方等 陀羅尼經 卷 1	延昌 3 年 (514) 歲次甲午 4 月 12 日	敦煌鎮經生 張阿勝 所写成竟	校經道人 典經師 令狐崇哲	S6727 (池 168)
14	成実論 卷 8	延昌 3 年 (514) 歲次甲午 6 月 14 日	敦煌鎮經生 師令狐崇哲 於法海寺 所写此論成訖竟	校經道人	P2179 (池 169)
15	大品經 卷 8	延昌 3 年 (514) 歲次甲午 7 月 22 日	敦煌鎮經生 曹法壽 所写經成訖	校經道人 典經師 令狐崇哲	北 1442 (池 170)
16	大品經 卷 8	延昌 3 年 (514) 歲次甲午 7 月 22 日	敦煌鎮經生 曹法壽 所写經成訖	校經道人 典經師 令狐崇哲	京都博 (池 171) 〈疑〉

るが、たまたま残ったものが華嚴經だったとも言える。

書写年代は513年10本・514年4本と、この2年間のものが最も多く、令狐崇哲本人が書いたものにもこの両年の年紀がある。

書写者として曹法壽・劉廣周・令狐礼太・馬天安・張顯昌・令狐永太・張乾護・張阿勝の名が出ており中には重複している經生もいる。令狐崇哲の場合は「師」と頭についているが、あくまでも經生の一員でありながら指導的立場にあったということがわかる。また官經生と經生については、同一人物でありながら「官」字の有無があることから区別ではなく省略と見たい。

令狐崇哲が関わる写經の識語には「典經師」「校經道人」が連ねられるが、この時期に限定された特徴的な形式であり、呼称そのものも他には見られない。典經師は令狐崇哲、校經道人には惠顯・洪儒の2名の名が出るのみで、典經師は写經をつかさどる指導的立場にあった人物、校經道人は書写対象經論の内容あるいは書写されたものをチェックする人物であったと考えられる。校經道人と書かれた下は空白の場合が多く、消された跡が残っているわけでもないため、特に記さないがそういう役割を担った人物は存在したという意味であろう。

写經には、一つにはその書写行為によって第三者あるいは自身に何かしらの功德をふりむける願經、一つには經論の保存や伝承を目的にしたものがあり、性格が異なっている。典經師や校經道人の役割の規定は困難だが、このような職名が識語にあることや年月日の他はこれ以外に情報を組み込まないことを考慮すると、後者の性格を有した写經群であることがわかる。また、そのような性格であるならば、書き手にはより正確により見やすくという心情が生まれるし、さらにより美しくという要素も加わってくる。指導的立場とは、おそらく用具・用材に加え字配りや運筆法まで含めた書法的指導も含んだ指導を担う立場であったと考える。

2. 令狐姓をもつ人物について

次に、令狐崇哲の周辺情報として令狐姓をもつ人物について [池田集録] を基礎に情報を集約する。

【表2】¹²⁾

No.	經論名	年時	令狐姓の人名を含む記事	池 no.
(1)	妙法蓮華經 方便品	歳在己巳(429) 6月12日	令狐炭、為賢者輩董狗、写訖校定。	池 73
(2)	仏説首楞嚴三昧經 卷下	太縁2年歳在丙子(436) 4月中旬	令狐廣嗣於酒泉、勸助為憂婆塞史良奴、写此經。……	池 79
(3)	大集経巻 23	大代太平真君7年歳次 丙戌(446)10月20日	仏弟子令狐筭所供養経。唐兒祠中写竟。……	池 81
(4)	維摩経題等	天安2年(467) 8月23日	令狐隨兒課。王三典 張演虎等三人、共作課也。	池 94
(5)	仏説観仏三昧海經 巻4	年次未詳 大約5世紀	信士張雙周、為命過妻令狐胤姫写供養。	池 128
(6)	妙法蓮華經 巻4	正始2年(505) 4月	清信女令狐陀咒所供養経	池 149 〈疑〉
(7)	華嚴経 巻8	延昌2年歳次癸巳(513) 4月17日	敦煌鎮官経生令狐礼太写経訖竟	池 159
(8)	華嚴経 巻16	延昌2年歳次水巳(513) 7月19日	敦煌鎮経生令狐永太写此経成訖	池 165
(9)	摩訶衍経 巻31	神亀2年(519) 8月15日	経生令狐世康所写 校竟道人惠敬	池 178 〈疑〉
(10)	大般涅槃経 巻26	年次未詳 大約6世紀	……此以仏弟子清信女令狐阿咒、自惟穢業所招、早罹孤苦、思慕所天、情无已。……	池 390
(11)	金光明経 巻5	年次未詳 大約6世紀	令狐光和受持	池 400
(12)	大通方廣経 巻上	大隋仁寿3年(603) 2月14日	清信女令狐妃仁、發心減割衣資之分、敬写大乘方廣経一部。……	池 440
(13)	大般涅槃経 巻39	貞観元年(627)2月	令狐光和得故破涅槃……誦誦為一切衆生、耳聞声者、永不落三途八難、願見阿弥陀仏。	池 489
(14)	仁王般若経 巻上	延寿4年丁亥(627)9月	経生令狐善歆抄。用紙十九張、崇福寺法師「玄覚」覆校。	池 490
(15)	鷲冠子注 巻上	貞観3年(629)5月	敦煌教授令狐衰伝写。	池 493 〈疑〉
(16)	維摩詰経 巻下	延寿14年歳次丁酉(637) 5月3日	経生令狐善歆写 曹法師方法慧校 法華齋主大僧平事沙門法煥定	池 501
(17)	維摩詰経 巻下	延寿14年歳次丁酉(637) 5月3日	経生令狐善歆写 曹法師方法慧校 法華齋主大僧平事沙門法煥定	池 502 〈疑〉

いま [池田集録] の No.509 まで (唐代・高昌国の文献まで) を対象に令狐姓をもつ人名を収集したところ、令狐炭・令狐廣嗣・令狐筭・令狐随兒・令狐胤姫・令狐陀咒・令狐礼太・令狐永太・令狐世康・令狐阿咒・令狐光和・令狐妃仁・令狐善歆・令狐衰といった名が見られた。

まず、(7) 令狐礼太・(8) 令狐永太の2名は、【表1】にもあるように、

令狐崇哲の指導を受けて写經を行っていた直接の関係者であり、写經所内での弟子と位置づけられる。(1) 令狐岌は自ら書写し校定している。(2) 令狐廣嗣もやはり自ら書写したようであり、「於酒泉」の記述は活動場所の手がかりの一つになる。(3) 令狐筭は仏弟子で、ここでは供養の対象とされている。(4) 令狐隄兒は、二人の仲間と共に「課」を作したとあり、自らの修行あるいは業務として練習したもののようであるから、やはり写經生であったか。(5) 令狐胤姫とは、信士張雙周の妻で、亡くなって写經を供養される対象として書かれている。(6) は〈疑〉だが、令狐陀咒が書写した供養經であると言う。(9) も〈疑〉だが、令狐世康は經生で、校竟道人を伴う【表1】のような形式が残っている。(10)・(11) は年次未詳であるが、(10) 令狐阿咒は、自らの境遇に苦しみ亡き夫の為に大部の写經を行った。「仏弟子清信女」とあり、(5) の例から言っても、在家信者に信士・信女を用いたことがわかる。(11)・(13) に令狐光和の名があり、(11) で「受持」と付されているが、これは後に翻經院¹³⁾ という形で整備されていく写經所での役職名として出るものの一つであるため、写經生として活動した人物と思われる。(12) 令狐妃仁は在家信者で、願經として書写した。(14)・(16)・(17) に令狐善歆の名があり、(17) は〈疑〉であるものの「經生」の記述は信頼できる。また、崇福寺所属の法師や法華齋主の沙門などの関係人物は写經所の内実に迫る手がかりとなる。さらに、「写」「校」「定」といった役割の表記は、(11) の「受持」同様、翻經院の原形を思わせるし、【表1】で示した令狐崇哲写經所の発展型と見ることができる。(15) も〈疑〉ではあるが、令狐衰が「敦煌教授」とされているため、教授という役割があった可能性を残したことになる。

次に、年代の表記を確認すると、(2) 太縁(太延)、(3) 太平真君、(4) 天安、(6) 正始、(7) (8) 延昌、(9) 神龜と、隋の統一以前のものは全て北魏朝で使用されていた元号であり、また、(14) (16) (17) の延寿とは高昌国で用いられた元号であることから、令狐姓をもつ仏典関係者は北魏朝の敦煌鎮で中心的に活動したが、高昌国や都市部へも活動の場を広げた一族であることがわかる¹⁴⁾。

また、令狐崇哲本人を含め、官立の写經所で書写にあたる人々が出家修行

者であった可能性は低く、あくまでも書写を専門的に行う人々という見方で「写経生」を捉えたい。在家修行者と見られる人には「信士」「信女」と付され、「仏弟子」「沙門」と冠する例があることに鑑みるならば、「官経生」「経生」あるいは「典経師」と表記されているまま受け取るのが妥当かと思う。

3. 令狐崇哲自筆の写経「李盛鐸旧蔵本」について

令狐崇哲自筆の写経を現在 4 本確認できることは先に示した通りであり、【表 1】の No.6「華嚴経卷 35」(P2110)¹⁵⁾・No.8「華嚴経卷 39」(S9141)¹⁶⁾・No.12「華嚴経卷 24」(李盛鐸旧蔵)・No.14「成実論」(P2179)¹⁷⁾ がそれぞれにあたる。【表 1】にも示したが、No.12 (池 167) が、この度『敦煌秘笈』で公開されたものに含まれているため、ここでその情報を加えたい¹⁸⁾。

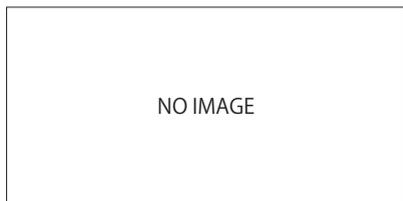


図 1

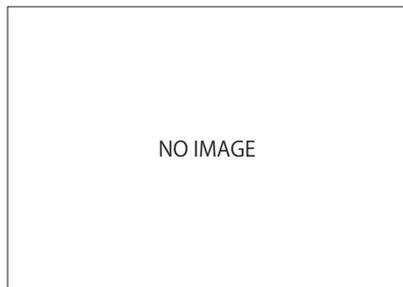


図 2

池 167 では、「李盛鐸 (旧) 松本文三郎『佛典の研究』 一二三頁。羅一背。李氏鑒藏燉煌寫本目録 (散〇一九三)」となっているが、この「李盛鐸 (舊)」が「羽 004」(図 1:外形、図 2:第 1 紙)¹⁹⁾ に改められる。『敦煌秘笈』では、その凡例にあるように、『敦煌遺書総目索引』中の「李氏鑒藏燉煌寫本目録 (據傳鈔本)」に符合すると考えられるものには、原題名の次にその番号が記されている。「華嚴経 (0193)」とあり、『敦煌秘笈』は羽 004 が散録 0193 に一致すると見ている。しかしながら、池 167 の識語には「燉煌鎮經生令

狐崇哲」、羽 004 には「燉煌鎮經生師令狐崇哲」とあり、池 167 で「師」の字が一字欠落していることを考慮すると、即座に一致させてよいものか若干の疑問は残るが、ここでは『敦煌秘笈』の判断に従う。

いま正蔵 (no.278、巻 9) と対比すると、まず見出しの付け方が違う。羽 004 の①第 6 紙 12 に「十地品之二」とあるが、正蔵では「十地品第二十二之二」(548 下 2)、②第 13 紙 21 に「十地品之三」とあるが、正蔵では「第三地」(551 上 6)、③第 21 紙 7 に「十地品之四」とあるが、正蔵では「第四地」(553 中 19) となっている。

また、巻の区分も違っていて、羽 004 では第 24 紙 1 の「一切衆生精進」で区切り、そこまでを第 24 巻にしているが、正蔵の場合は 548 頁中、つまり羽 004 ①の見出しまでを第 23 巻、「十地品第二十二之二」から第 24 巻としている。ちなみに正蔵の第 24 巻の終わりは、羽 004 には出ないが「第四地」、羽 004 で言うと「十地品之四」が終わるところであり、正蔵では第四地の終わりが「十地品第二十二之二」の終わりと一致し、「十地品第二十二之三」から第 25 巻に入ることになる。いずれにしても、羽 004 の第 24 巻の終わり方は不自然であり、意味の区切れや形式の変更もないところで唐突に切られている印象があり理解に苦しむ。

新たに図版が公開されたものであるため、本文の校勘など行うべきことは多々あるが、ここではまずもってその書きぶりについて注目したい。

4. 令狐崇哲の書風について

令狐崇哲に注目し、敦煌が鎮という行政単位名で呼ばれていた時期の写経が書体編年上、重要な鍵と見るべきとしたのもやはり藤枝晃氏であり、写経所に師弟関係の概念を持ち込み、全体として相通ずる風気が認められるのが自然だとの見方を示した²⁰⁾。またその異様に力強い筆致から、用筆に大きな違いがあったと見て、兎毫筆ではそれだけの強さが出せないから鹿毫系の筆であったはずだとした²¹⁾。ここでは、藤枝氏が「力強い」と表現する書風とは具体的にどのようなものなのかを検討する。

令狐崇哲直筆とされる4本すべてを資料とすべきところであるが、写真の精度という面から『敦煌秘笈』の羽004と『墨美』156号のS2179を使用する。まず、令狐崇哲の署名を確認するために、両識語を並べてみる。

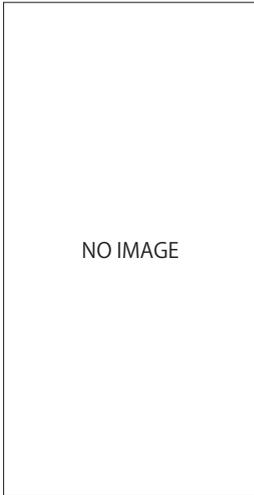


図3

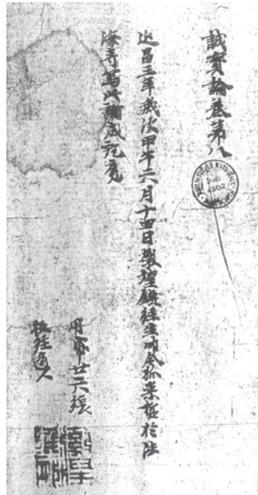


図4



図5



図6

羽004識語(図3)とP2179識語(図4)の形式が同様で、【表1】で見たように、これが北魏燉煌鎮写經の識語の書き方ということで一つの定型になっていたことがわかる。

図4の方は字が詰まり気味で太みの線で書かれているのに対して、図3の方は字間をゆったりとり、細みの線を入れてくるため若干弱い印象を与えている。

署名の部分のみ拡大して見るとその違いはより鮮明になる。〈令〉は[・]ひ[・]と[・]が[・]し[・]ら[・]の角度や右ハライの重さが全く異なる。〈狐〉は[・]け[・]も[・]の[・]へ[・]ん[・]のハネや3画目の角度が異なるし、図5では傍の最終画を抜いていくのに対し図6では重量感をもってとめている。〈崇〉は[・]や[・]ま[・]か[・]ん[・]む[・]り2画目が図5では斜めに下りてくるのに対し、図6では垂直に下ろしている。「示」の左右の点が共に落ちていたため緊張感がない図5に対して、図6は示の左右の点を共に

落とさないなので引き締まっている。〈哲〉は「折」のてへん1画目の右上がり角度、長さ、重量感が違うし、「折」が「口」にのってしまう図5と「斤」だけがのる図6という具合に構造そのものが違っている。

書いた時期が9ヶ月と少し違うことや、一人の人間は様々な書きぶりを示すことができることを考慮したとしても、同一の楷書体で同様の目的で書かれるものの署名がこれほど相違することは考えにくい。この識語は同一人物の手によるものではない可能性が高い。

次に、羽004とP2179で同一の文字あるいは同一の部首を含む文字を比較して特徴を確認する（以下、羽004は紙数一行数を示し、P2179は行数を示す）。

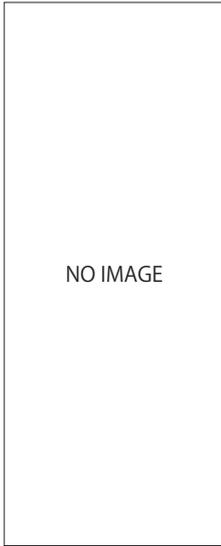


図7
羽004-3-17

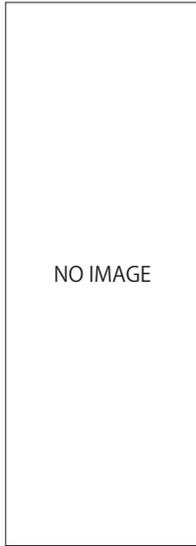


図8
羽004-8-6

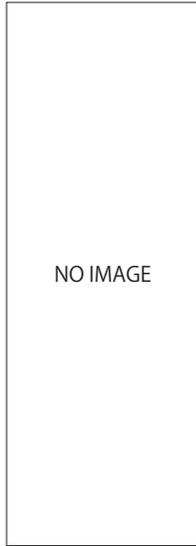


図9
羽004-19-12



図10
P2179-262



図 11
P2179-119



図 12
P2179-333



図 13
P2179-261



図 14
P2179-296

図 7～9 が示すように、羽 004 では同一文字を一定の書き方で書くことが徹底されている様子がうかがえる。もちろんその時の筆や運筆の具合で線の太さや角度などが変わってくるのは当然だが、点画の書き方は同一である。〈一〉はそれぞれ起筆の角度が違うが、鋭い線でゆるやかに入り、徐々に重量感をもたせていく。〈切〉は「刀」の左ハライの長さに違いはあるが、偏と旁を離している点は共通する。〈衆〉は「血」の最終画の起筆は〈一〉のようにゆるやかに入らず、一度止まってから送筆し収筆部でまた止める三折法が見られる。最終画の磔は特に図 9 が鋭角な三角形を形成している。〈生〉は 3 本の横画の関係性を見ると、2 本目を図 7 では長めに図 9 では短めに書いていて全体の印象を変えているが、3 本目の上そりを強めにして縦画の頭を長く出すところは共通している。

P2179 では「一切衆生」と 4 字並ぶ例が図版では 1 例のみだったため、「一切」と「衆生」に分けて 2 例ずつ載せた。図 10～12 が示すように、羽 004 では「一」が起筆の止めが見られなかったが、こちらでは三折法で書かれている。また〈切〉の偏と旁が密着しているため、中心へ凝縮された印象になっている。点画の密着、偏と旁の接近、それがもたらす求心的な印象は〈切〉に限ったことではなく、図 13・14 の〈衆〉にも言えるし、P2179 全体に通じる特徴でもある。〈衆〉の左ハライ 2 本にかかるようにして点が付されているのは羽 004 には見られない特徴である。また、図 10 では右ハライを止めて点のように書いているのに対し、図 13・14 では磔にしている。同一本内でも書きぶりに変化をつけていることがわかる。

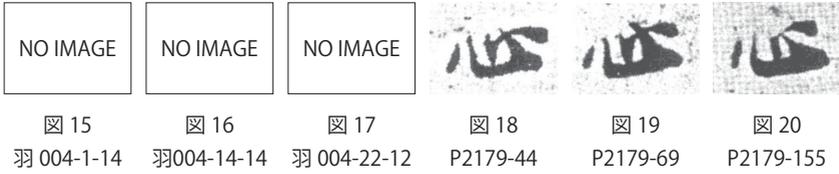


図 15～20 は〈心〉の例を出したが、彎筭部は肉厚で最終のハネがかなり上方まではね上げられているのが特徴的で、地・已などのおつこうも同様である。図 15～17 では点が浮いているが図 18～20 では線に付いているという違いはあるが、いずれも続けて書かれている。



図 21～図 26 では、北魏敦煌鎮写經の最大の特徴とも言える画の例を示した。羽 004 と P2179 で同一文字を比較できたのは図 21・24 の〈頂〉のみだが、図 22 〈寶〉・図 25 〈寶〉、図 23 〈願〉・図 26 〈煩〉、「頁」と「貝」の違いはあるものの、曲尺の転折以降の垂直画が極端に長いという特徴である。図 22 は若干控えめであるが、いずれも貝の脚部よりはるか下方まで伸ばしている。また、図 21～23 の羽 004 ではそのまま線を止めているが、図 24～26 の P2179 でははねあげており、特に図 24 ではかなりの重量感をもって筆を押し上げている印象がある。図 21 と図 23 の場合は「頁」の右上がりがおさえられ更に転折部が若干落ち気味であるにも関わらず曲尺の垂直画を伸ばすため、偏と隣のバランスからいっても右が落ちている印象となるが、図 24 と図 26 は、右上がりが強めであるため、曲尺の垂直画がこれほどまでに長くても、右側が下がるような印象を与えずにバランスを保つ

ている。P2179 の段階に至ってより美的考慮がなされ、また装飾的要素を強めたと言える。



図 27 図 28 図 29 図 30 図 31
羽 004-4-14 羽 004-16-17 羽 004-16-11 羽 004-16-8 羽 004-17-3



図 32 図 33 図 34 図 35 図 36
P2179-162 P2179-73 P2179-72 P2179-32 P2179-31

図 27～図 36 では特に右ハライに注目して同一文字を比較した。いずれも最終画となるハライの部分で、肉厚に太めに書いていることが分かる。磔は羽 004 の方が長めという傾向があり、磔の手前の送筆部が多少細身なので磔がより目立ってくる。対して P2179 は最終画のはじめから太めに入るので磔そのものは目立ってこないという違いがあるようだ。また図 30・35 に示したように〈故〉ははらうというより右斜め下に抜いていくように書いている。

以上、若干ではあるが、羽 004 と P2179 で同一の文字あるいは同一の部首を含む文字を比較してその特徴を確認してきた。基本的には一字の点画や構造としては同様の認識で運筆しており、筆の状態やそのときの運筆具合で表現に違いが生まれているということである。〈衆〉のように点画が違うものの中にはあるが、9ヶ月間の令狐崇哲の文字理解への変化、あるいは新たな表現の模索と見たい。また、〈衆〉のところで触れたように、P2179 では同一文字で違った書き方をするものが散見される。表現に幅を持たせ、自由に筆を運んでいる印象が強い。これは、素材の仏典が経か論かという違いに

由来するものなのかわからないが、例えば行書的に点画が続くものが見られるのも P2179 (〈有〉 22、〈文〉 25、〈又〉 248・262 行目など) である。

先に示した通り、羽 004 は「巻第 24」の区切りが唐突であることや署名の書きぶりが P2179 のそれとあまりにも違うことから識語の信憑性への疑問は払拭できないものの、本文の書風の特徴から共に令狐崇哲のものであると言えるし、逆に令狐崇哲の表現に幅の広さがあったと意味づけたい。おそらく用筆の具合の違いというのが大きく影響したのではないと思われる。

ちなみに羽 004 の署名の〈令〉と本文中の〈令〉を比較すると、例えば羽 004 第 9 紙の 2・4・6・8・12・14・18・19・21 行目に出るが、18 行目のものなどは署名のものに比較的近い。識語は別な人の手によるものであるという即断は避けたい。

次に参考として弟子の作品 1 本をとりあげて一部を比較したい。

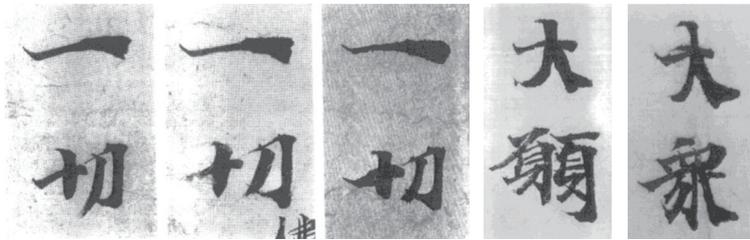


図 37

図 38

図 39

図 40

図 41

図 37～41 は「大谷大学所蔵敦煌本華嚴經 47」で、『墨美』120 号冒頭に収録されている藤枝氏自ら撮影した写真を転載したものである。この写經の書写者は張顛昌で識語には「典經師令狐崇哲」とある(【表 1】No.9)。

図 7～14 に示した〈一〉〈切〉〈衆〉の特徴をよく捉え、忠実に表現しているが、〈一〉の止めや〈衆〉の磔などはより強調されていることがわかる。〈願〉曲尺の転折以降の垂直画が極端に長いという特徴も同様で、P2179 以上に強く押し上げるハネを付している。弟子が師匠の特徴の一部を誇張して表現する傾向が現れていると言えるかもしれない。

小結

以上、令狐崇哲の人物像を把握するために〔池田集録〕を基礎資料として本人の名が出る識語を収集し、さらに令狐姓の人名が出る識語の検討も行い、令狐崇哲自筆の写経2本に注目してその書風の特徴を確認した。

令狐崇哲は、北魏朝の永平4年～延昌3年(511～514)に敦煌鎮で官立写経所の指導的立場にあった写経生の一人で、曹法壽・劉廣周・令狐礼太・馬天安・張顯昌・令狐永太・張乾護・張阿勝といった写経生の師として指導にあたり、書写者として活動もしていた。現在では、自筆のものが4本と、指導にあたったものが12本(うち〈疑〉を1本含む)、確認することができる。

また、同様の令狐姓をもつ人物には、令狐崇哲と共に写経所で書写活動を行った令狐礼太・令狐永太の他、令狐岌・令狐廣嗣・令狐隄兒・令狐世康・令狐光和・令狐善歆など、写経生として活動した者が多く見られるし、在家信者として大部の経を書写した者も見られ、5世紀前半から7世紀前半まで敦煌鎮で中心的に活動し高昌国や都市部へも活動場を広げた仏教信仰の厚い一族であったと言える。

令狐崇哲の自筆の写経「羽004」と「P2179」に注目して、具体的に何文字か取り上げてその特徴を見たが、「頁」と「貝」に見られる曲尺の転折以降の垂直画が極端に長いというのが最大の特徴であった。更にP2179では重量感をもって筆を押し上げたハネが見られ、弟子になるとその点が一層誇張されることを確認した。またP2179では、同一文字を違った書き方で表現している点も美意識の観点から興味深い点である。

本稿では、文字の構成要素ごとに分解し体系的にその特徴を見いだすところまでできなかったため、稿を改めて考察したい。

註

- 1) 藤枝晃「ペリオ蒐集中の北魏敦煌写本『誠実論』卷第八残卷(F.P.chinois2179) 解題」(『墨美』156号、1966)。その他、北魏の敦煌写経に関する藤枝の論考は次の通りである。「敦煌写経の字すがた」(『墨美』97号、1960)、「北朝写経の字すがた」(『墨美』119号、1962)、「大谷大学所

蔵 敦煌本『華嚴經』卷第四十七解題』（『墨美』120号、1963）。

- 2) 藤枝晃『文字の文化史』（講談社学術文庫、1999）182頁。
- 3) [註1] 藤枝『墨美』119号。
- 4) 池田温『中國古代寫本識語集録』（東京大学東洋文化研究所、1990）。
- 5) 王重民『敦煌遺書総目索引』（中華書局、1983）。
- 6) 『敦煌秘笈』の出版については、岩本篤志「杏雨書屋蔵「敦煌秘笈」概観」（『西北出土文献研究』8号、2010）で、出版されてすぐに紹介されていた。また、北京大学・榮新江『辨偽与存真—敦煌学論集』（上海古籍出版社、2010）の書評、岩本篤志「敦煌文献とは何か」（『東方』361号、2011）では、『敦煌秘笈』の出版が公になる以前に書かれた榮新江「李盛鐸蔵敦煌写卷的眞与偽」は、『敦煌秘笈』冒頭の432点と売却された李盛鐸コレクションとが一致することの傍証になりうると指摘している。
- 7) 落合俊典「李盛鐸と敦煌秘笈」（印仏研52-2、2004）。
- 8) 『敦煌秘笈』目録冊冒頭。吉川氏は高田時雄「李滂と白堅—李盛鐸舊蔵敦煌寫本日本流入の背景」（『敦煌写本研究年報』創刊号、2007）に依っている。
- 9) [註4] 前掲の池田氏の研究（〔池田集録〕）は、養鸕徹定に始まった識語の集録作業、羅振玉・羅福萇による新出写本への注目、ジャイルズ・陳坦・許国霖・王重民らの整理目録、矢吹慶輝による古逸仏教文献の紹介などの延長にあるもので、「写本理解の重要なキーとなる識語をなるべくひろく蒐め、年次によって排列し一覧できる資料集があれば」という願いのもと、その目的を達成するために総合的にまとめられた識語集である。

識語の内容を考慮した標題を一件ずつ新たにつくり、年時の明らかなものは年月日順に並べ、年紀を欠くものは推定して適當箇所においている。また、原本の眞実性に疑問がある場合は〈疑〉が附されている。所蔵・図版の所在・収録されている目録や論文、これらを基礎情報とし、参考記事を加えている。

- 10) 李富华・姜德治『敦煌人物志』（甘肅人民出版社、2009、78頁）では、令狐崇哲に関して「北魏敦煌人。敦煌鎮經坊典經師和写經師。敦煌遺書存其署名典經五部，写經三部，凡八部。」とあるのみで、具体的に8

- 本の写経を挙げるが、いずれも〔池田集録〕に記載されている。また、『敦煌学大辞典』の記述に依っているようだが、成実論（誠実論と表記）S.1474 とあるのは、S.1427 の誤植である。
- 11) この表は〔池田集録〕で令狐崇哲に関わる部分を集め、必要項目のみ抜き出し、必要に応じ情報を加えたもの。数字は算用数字に改め、人名以外は新字体に改めた。「池 no.」とは、〔池田集録〕で附された通し番号。傍線は筆者。No.5 の摩訶衍経とは大智度論のこと。No.15,16 の小品経とは摩訶般若波羅蜜経のこと。
 - 12) 〔註 11〕に同じ。波線は筆者。No. (9) 摩訶衍経とは大智度論のこと。
 - 13) 拙稿「唐代翻經院における潤文について」（『宗教研究』84-4、2011）
 - 14) 〔註 10〕前掲の『人物志』79～80 頁では、令狐整（511-572）とその父である令狐虬、その弟である令狐休が取り上げられており、いずれも高官の役人であったことがわかる。
 - 15) 池 161。P 目 I 図版 7 頁・敦煌宝蔵 114、56 頁。
 - 16) 池 163。記載なし。2011 年に 1～10 巻、2013 年に 11～20 巻が刊行された『英国国家図書館蔵敦煌遺書（漢文部分）』（方廣鋤，英・呉芳思主編、上海師範大學、英國國家圖書館合編）を未見で収録の有無を確認していない。
 - 17) 池 169。P 目 I 図版 13。藤枝、墨美 156、36 頁。書法叢刊 20 巻 52 頁。敦煌宝蔵 116、350 頁。ここに指摘の通り、藤枝晃の拡大写真と研究がある。拡大写真は、藤枝氏が直接入手したマイクロフィルム（陽画）から作成したもので、陽画から引き伸ばした印画から製版した部分図は白黒反転しているが拡大倍率が高く大変参考になる。藤枝氏によると、首部：欠／紙数：18 紙のみ存（元来 26 紙）／一紙長：25.5 × 37 cm（当時の 1 × 1.5 尺だった紙の縁を裁ち落としてこの寸法になったもので、卷子として通常の寸法）／一紙行：22 行（第 3～6 紙はそれぞれ 1～4 行不足する。毎紙末の書き損じ部分を切り捨てて次の紙に書き継いだもの。第 14 紙は末 2 行を捨て忘れた痕跡あり。）／本文：372 行／尾題識語：5 行。P2179 では巻 8 の終わりが示されているが、正蔵の同様箇所は第 7 巻に合致する。また P2179 では「誠」実論だが、

正蔵では「成」実論となっており、一般的な書名としても後者である。このP2179の他にS1427「成実論」（池154）・S1547「誠実論」（池156）、両本とも【表1】に出る北魏燉煌鎮写経だが、言偏の有無が意味するところは不明である。藤枝氏はS1427が20巻本、S1547が24巻本と見ている。

- 18) 『敦煌秘笈』には、「令狐風」と分析されている写経が2本確認できる。一つは羽262「大方廣佛華嚴經卷第二十三・二十四」で「一見令狐風存?」、一つは羽588「大方廣佛華嚴經卷第五十一・第五十二」で「令狐風存」としている。共に識語はないため書風から判断して収録段階であえて付加した記事である。
- 19) 『敦煌秘笈』影片冊一、40～53頁。目録の情報は次の通り。①番号：四／題名：大方廣佛華嚴經卷第二十四 ②原番号：四／原題名：華嚴經(0193) ③首題：欠 ④尾題：華嚴經卷第廿四 ⑤用紙：縦25.4×横869.9cm／簾条数5（cm当り）／一紙長：縦25.4×横36.5cm／紙数27／紙質：鹿麻紙／色：浅ブラウン／染：有 ⑥一紙行数：22／字詰め：17 罫線ナシ／界高・罫巾：記載なし ⑦巻軸・巻軸長・径：記載なし ⑧字体：記載なし ⑨体裁：卷子本 ⑩同定大正No.：278・第9巻・54頁※・下欄・7行－554頁・中欄・4行－（※これは、54頁ではなく546頁。誤植と思われる。） ⑪記事：1. 首部印一顆「木齋審印」 2. 尾題下印一顆「李滂」 3. 識語 延昌二年歲次癸巳八月廿七日燉煌鎮經／生師令狐崇哲所寫經成訖竟／用紙廿四張／校經道人 4. 「延昌二年」二墨印一顆 5. 末尾印二顆「敦煌石室秘笈」「李盛鐸合家眷屬供養」 6. 第五紙第14行「法界世涅槃」=大正「涅槃」 7. 第六紙第8行首小字「下」アリ。能以百菩薩但以略解脫若欲廣說者億却不能盡」の一行、誤寫、不用。
- 20) [註1] 前掲論文。『墨美』156号。
- 21) [註1] 前掲論文。『墨美』119号。この用筆に関する研究は[註2] 前掲書『文字の文化史』でさらに深められ、(1) 古筆、(2) 鹿毫(秦筆)、(3) 兎毫竹管(今筆)という三段階の筆の進化が、篆一隸一楷という書体の変遷に対応しているとの説を提示している。